

大学院生によるアメリカの小中学校における 体験型海外教育実地研究報告V

小原友行・深澤清治・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子・澤口陽彦*
清水典子*・庄本恵子*・福山 理*・古石卓也*・中村光則*・松原直哉*
(2011年12月2日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary / Secondary Schools in the United States (V)

Tomoyuki KOBARA, Seiji FUKAZAWA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA,
Nagako MATSUMIYA, Haruhiko SAWAGUCHI, Noriko SHIMIZU, Keiko SHOUMOTO,
Osamu FUKUYAMA, Takuya FURUIISHI, Mitsunori NAKAMURA and Naoya MATSUBARA

Abstract. The present short report reviews the 5th overseas teaching practicum in the United States by seven graduate students of Hiroshima University, Japan, partly organized by Hiroshima University Global Partnership School Center since 2006. The students majoring in learning science and science education planned and conducted lessons in English in three local public schools in the state of North Carolina. The significant features of this project are three-fold: 1) to develop practical instructional competence in consideration of the pupils with different cultural backgrounds; 2) to enhance the abilities in developing teaching materials through hands-on teaching experiences in English; and 3) to acquire the abilities to design, implement and evaluate programs for promoting global partnership. Among the major achievements by the participants through this project are increased awareness of the goals of the lessons and development of communication skills in the classroom. It is hoped that this experience abroad will further enhance the Japanese students' competence and confidence in teaching.

1 はじめに

「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（略称はGPSC）が企画しているプログラム（2009年度からは教育学研究科「教職高度化プログラム」の選択科目）として始まったが、本年度は第5回目の実施である。本年度は、博士課程前期1年の大学院生4名（学習科学専攻2名，科学文化教育専攻2名），同2年の大学院生3名（学習科学専攻2名，科学文化教育専攻1名）が参加して実施された。本年度の特徴は，2年生3名が昨年度に続いての連続参加であったことである。

この授業科目の大きな特色は，次の3点である。

- ① 言語に頼らない授業実践が求められるため，米国の児童・生徒の実態に応じた指導方法の開

発・工夫を行う実践的指導力が形成できること。

- ② 日本文化に関する教材を開発し，それを米国ノースカロライナ州の公立小・中学校において英語で授業を行うという体験や，現地での優れた教師の授業見学を通して，文化の相互理解を図るための教材開発の力量が形成できること。

- ③ グローバル・パートナーシップを推進するために必要なプログラムの開発・企画・実施・評価を行う力量が形成できること。

授業は前期の集中科目の位置づけであるが，実際は年間を通したプログラムとなっている。具体的には，4～8月の事前研究，9月19日～26日の米国ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立小・中学校（ウォールコート小学校，エルムハースト小学校，C. M. エッペス中学校）での教育実習と私立のピータース・カソリックスクール

* 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

(幼小中一貫校)の授業見学, 州都ローリー市内のエクスペロリス中学校の授業見学, 首都ワシントンDCでの多文化理解学習のための教材調査, そして10~11月の事後研究による教材の完成とレポート作成, 12月の研究成果報告会となっている。

なお, 本年度は, 7月9日に開催された「学校間交流国際フォーラム」のために実習校であるウォールコート小学校とエルムハースト小学校から2名の指導教員に来日してもらったこともあり, 事前の指導案検討や現地での授業実践がより質の高いものとなった。また, 実施にあたっては, GPSCのパートナー校であるイーストカロライナ大学教育学部のサンドラ・ウォーレン先生から格別のサポートをいただいた。以下では, 本年度の概要, 参加者の報告, 評価について紹介していきたい。

2 2011年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1) 全体日程

2011年度, 本授業科目の実施状況(全体日程)は以下のとおりであった。

4月6日(水)	2011年度「体験型海外教育実地研究」実施説明会
5月10日(火)	本授業の概要と計画説明
5月25日(水)	授業研究テーマ案の発表
6月9日(木)	学習指導案の検討(1)
7月30日(木)	学習指導案の検討(2)
7月9日(土)	第7回学校間交流国際フォーラム参加
7月10日(日)	2011年度体験型海外教育実地研究授業研究ワークショップ参加
7月29日(金)	学習指導案の検討(3)および教材・教具の検討
9月3日(土)	学習指導案の検討(4), 教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
9月12日(月)	渡航前最終打合せ
9月17日(土)~9月26日(月)	米国における体験型海外教育実地研究
12月20日(火)	「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2) 現地での日程

9月17日(土)	広島出発, 米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
9月18日(日)	授業準備および授業打合せ

9月19日(月)	グリーンビル現地学校訪問(観察)
9月20日(火)	グリーンビル現地学校訪問(実習)
9月21日(水)	St. Peter's Catholic School訪問, グリーンビルからローリーへ移動
9月22日(木)	Exploris Middle School訪問
9月23日(金)	ローリーからワシントンへ移動
9月24日(土)	ワシントン研修
9月25日(日)	ワシントン出発, 機内泊
9月26日(月)	広島到着

(3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には, 前述のとおり大学院生7名が参加した。そのうち3名は, 希望による連続参加である。連続参加者のうち2名は昨年度の実験や反省点を踏まえての授業実習を目指した。もう1名は, ティーチングアシスタント兼メンターとして参加者および教員のサポートを行った。なお, 参加大学院生の渡航費用や滞在費はすべて自己負担となっている。

参加学生の現地での学校配置, 担当者, 参加者, 引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【Elmhurst Elementary School (K-5)】

実施校担当者: Ms. Wanda Williams

参加者: 松原直哉・清水典子

引率者: 小原友行・朝倉 淳

【Wahl-Coates Elementary School (K-5)】

実施校担当者: Ms. Cindy Watson

参加者: 古石卓也・庄本恵子

引率者: 松浦武人・松宮奈賀子・澤口陽彦

【C.M. Eppes Junior High School (6-8)】

実施校担当者: Ms. Joanne McClellan /

Ms. Rebecca Beaulieu

参加者: 中村光則・福山 理

引率者: 深澤清治

3 参加者の報告

参加者(6名)は, 各校において実践した授業に関する「ねらい」, 「概要」, 「成果と課題」および授業の準備から実践を通じた「自己変容」について報告を作成した。次頁以降にこの報告を掲載する。

第4学年 異文化理解 “Let’s Enjoy FUROSHIKI!!”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 古石卓也

1 ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的な道具である「風呂敷」を体験することで、日本の「もったいない」という考え方を理解することである。また、日本でいう「もったいない」という考え方のように、伝統的な考え方の重要性に気付かせ、自分の国の伝統的な考え方にも目を向けるきっかけになればと考えた。

2 概要

(1)風呂敷の紹介

風呂敷の使用方法や柄の意味などを、実際に風呂敷や図柄を示すことによって説明した。

(2)風呂敷を用いた活動

風呂敷を一人一枚ずつ配布し、実際に風呂敷を用いて様々なものを包む活動を行わせた。まずは、四角いものを包む方法であり最も基本的な包み方である「お使い包み」と呼ばれる包み方を全員で行った。包む材料にはプラスチック製の箱を用いた。その後、「お弁当包み」、「びん包み」、「すいか包み」、「うさぎ包み」を自由に選択させて行わせた。ここでは、ペットボトルと、おもちゃのボールを包む材料として用いた。



(3)「もったいない」の紹介

風呂敷を用いて様々なものを包む活動を行った後に、日本の伝統的な「もったいない」という考え方を紹介した。「もったいない」という考え方はどのような考え方なのかということ、英語で近い意味のことばや、「もったいない」という言葉を用いる具体的なシチュエーションを用い口頭で説明した。また、風呂敷も「もったいない」という考え方の一つの表れであることもつなげて説明した。

3 成果と課題

成果としては、風呂敷を用いて様々なものを包む活動を子どもたちが楽しんでくれたことが挙げられる。結ぶという動作に慣れていないようで試行錯誤していた様子だったが積極的に質問をし、活動に取り組んでいた。

課題としては、本来の目的である「もったいない」という考え方を十分に子どもたちに伝えることができなかったことが挙げられる。活動時間を長くとりすぎたため、授業の最後の「もったいない」の説明を十分に行うことができなかった。時間配分や説明の仕方を工夫する必要もあった。また、自分の英語力の問題から子どもの質問の対応に困る場面が多くあった。ジェスチャーなどで伝わる部分もあったが、子どもとコミュニケーションをとりながら授業をすすめていくためには、英語力、特にリスニング力が必須だということ強く感じた。自分の伝えたいことはジェスチャーなどで補うことができるが、子どもたちの言葉を聞き取ることが出来なければその対応自体行うことができないからである。

【自己の変容】

授業準備で「風呂敷」や「もったいない」ということに関して調べていくことを通して、自分自身改めて日本の伝統的な考え方の素晴らしさを感じることができた。

また、異文化教育を行っていくうえで、教材の工夫はもちろん大切なことであるが、それ以上に教師の英語力が重要になってくることを痛感した。しかし、言葉の壁があるなかでも、子どもとコミュニケーションを取れた瞬間には大きな喜びを感じることができた。

第4学年 音楽科 “Listening to the Japanese tune, and applying the title to it.”

教育学研究科学習科学専攻カリキュラム開発専修 清水典子

1 ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的な音楽を歌ったり聞いたりして楽しむことや「春の海」を聞いて、曲に題をつけたり絵を描いたりすることができることである。さらに、日本の児童の描いた絵を見て、その特徴について考えることで、日米の小学生の考え方や感じ方の違いに気付き、この授業を通してお互いの国に興味を持つことができることもねらいとしている。

2 概要

- (1)自己紹介の後、今日の学習であることを初めに説明した。
- (2)ウォーミングアップで児童に立ってもらい、リズムに合わせて手や足を動かした。リズム感が良く、全員が協力してくれた。
- (3)手遊び歌「月」を日本語で歌いながら紹介した。「TUKI」とは何かを当てるクイズをすると、児童は勢いよく手を挙げていた。その後児童とともに、「月」を歌いながら手遊びをした。
- (4)「春の海」を聞いて、イメージ画を描くことを説明した。



- 予定では1回曲を流して終了する予定であったが、児童が絵を描くのに時間がかかったため、初めの演奏部分をさらに3分間流した。
- (5)自分のつけた題名と、描いたイメージ画を紹介してもらおう。進んで手を挙げた児童と、教師が依頼した児童とで、4名の児童の絵を紹介する。
 - (6)作曲者と曲の題名をクイズ形式で紹介する。尺八と琴の紹介もする。
 - (7)日本の児童の描いた絵を紹介する。児童からは「おおっ」というどよめきや「自分と一緒に」という声が聞こえた。
 - (8)最後に感想を書いてもらって終了した。予定よりも長時間（60分）の授業になった。

3 成果と課題

- 長時間の授業であったが、児童が集中して授業に取り組み、日本の音楽に興味を持って活動することができた。
- 学習の意図が児童に伝わり、全員がイメージ画を描き、題名をつけることができた。
- 日本の児童の描いた絵に興味を持って鑑賞できた。
- 授業時間をかなり延長してしまった。授業内容が多かったことと、児童に合わせて予定を変更してしまったことで時間不足になった。
- 中心になる活動の前の活動に時間をかけすぎてしまった。そのため、「春の海」のイメージが「月」「夜」などに偏ってしまった。「月」の曲に時間をかけすぎてしまい、それが「春の海」の曲のイメージ画に影響を与えたと思われる。
- 自分の語彙力不足から、児童に学習内容の説明が十分にできなかったことや、児童から出た意見を理解し授業に生かしていくことができなかった。

【自己の変容】

英語での指導案作りを通して「授業」や「指導案」の在り方を改めて考え直すようになった。目標を明確に示し、内容を精選すること。シンプルで分かりやすい指導案を作ること。教材は視聴覚に訴え厳選すること。これは普段の自分の授業や指導案に欠けている点であることを痛感した。

今回特に、総合的な学習の時間を専攻している私にとって、Exploris中学校の総合的な学習を参観できたことやその授業方法を垣間見られたことは貴重な体験であった。総合的な学習の時間の持つ可能性を感じるとともに、日本で自分がしなければならないことは何かを考えている。2度目の体験型教育実地研究でさらに、自分自身の教師としての資質と能力とこれからの課題を見つめ直すことができた。

第4・5学年 社会科 “Globalization and Glocalization through MacDonald”

教育学研究科科学文化教育工学専攻社会認識教育学専修 松原直哉

1 ねらい

本授業のねらいは、マクドナルドのハンバーガーを通して、グローバル化とグローカル化という文化の伝播とその変容について理解することである。

2 概要

本授業は、まず導入では、マクドナルドのショップが世界にどのくらいあるか、という発問をもとに、マクドナルドが世界中に展開しており、それを通して世界中にアメリカの食文化が広まっていることに気づかせた。

展開部はグループ活動による学習活動がその中心であり、その構成は大きく3つに分かれている。展開1では3カ国のマクドナルドのメニューを示して、どの国のメニューか考えさせた。展開2ではメニュー上のハンバーガーが描かれたカードを使って、各国のメニューを比較させた。展開3では、各国の文化の特徴を考えさせた。



そして終結で、現地の国の習慣や宗教などに合わせて文化変容が起きるというグローカル化とその要因について説明した。

3 成果と課題

授業の実際として、子どもたちは作ったマクドナルドのメニュー表を使って、非常に興味深く学習活動に取り組んでいた。そこから得られた本授業の成果は以下の点である。

第一に、マクドナルドを教材として文化のグローバル化とグローカル化という授業が、アメリカでの授業として成立した点である。この授業は日本の中学校でも実践済みだが、マクドナルドの本場であるアメリカでこそ、むしろ自分たちの国の食文化が世界中に広がり、また、現地の文化に合わせて変容していたということに大きな驚きがあったようだ。

第二に、アメリカでの実際の授業を通して、視覚的に学ぶことの重要性が認識できた点である。今回の授業では自分の英語力を鑑みて、できる限り視覚的に理解できるような授業展開を考えていた。それはマクドナルドのメニューといった具体的な教材と電子黒板及びパワーポイントを使った写真や図の提示である。まず、メニュー表は、それと対応したハンバーガーのカードを用意して、子どもたちがメニュー表やカードを使って自分の考えを述べていたので、私自身もそうであるが、他の人に自身の考えを分かりやすく説明できるのだ。実際に子どもたちはカードを効果的に活用しながらグループ内で議論をしていた。さらに、抽象的な説明をするところでは、子どもたちがイメージしやすいような写真や図を積極的にスライドに提示しながら説明したので、子どもたちは私の英語を聴覚で聞くとともに、これらを通して視覚的にわかるので、私が伝えたいことを理解してくれたと考える。

そして今回の課題は、日本とアメリカ、インドの3カ国のマクドナルドのメニューの比較を通して、各国のメニューの特色に気づくことが授業の中心であった。これはある程度達成できたと考えるが、その理由や背景を私が説明してしまったので、これを子どもたちが主体的にその要因を考えていくことができる学習活動を取り入れれば、さらに子どもたちの認識が深まると考える。

【自己の変容】

本授業実践を通して、“子どもたちが学ぶこと”の重要性を再認識した。アメリカの教師が授業において最重要と考えていることが、子どもたち自身が主体的に学んでいくということではないかと感じた。これは指導案検討会及び現地での授業見学等を通じて、子どもが学べる学習活動に重点が置かれていたと考えたためである。このことは、講義型の授業形式に終始しがちな私にとって、今後に向けた大きな改善点を見つけることができたと思う。

第5学年 社会科 “What image is your country?”

教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修 庄本恵子

1 ねらい

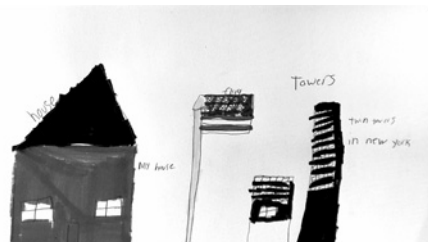
現在学校教育において、盛んに「国際理解」「多文化理解」といった言葉が唱えられている。学校教育は、すでに到来しているグローバル社会に対応できる子どもを育てるために、子どもたちに他の国の文化を知り、学び、体験させ「互いの理解を深める」活動を行っていくことが求められている。

そこで、本実践では「互いのことを理解する」ための入り口の授業として、お互いの国のイメージを知ることが授業のねらいとした。互いのイメージを共有し、自分たちが思ってもいなかった自国像を認識することで、様々な視点から他国を知り、自分の目で見、聞いて、実際に話して理解することの大切さを実感できると考えたからである。

2 概要

授業の流れは以下の通りである。

①生徒に自国（アメリカ）のイメージを絵か文字で紙に描かせる、②日本の生徒（中学校2年生）が描いたアメリカのイメージを紹介する、③日本のイメージを紙に描かせる、④日本の生徒が持つ日本のイメージを紹介する。実際にアメリカの生徒が描いたアメリカのイメージが右の絵である。この生徒は自分の家、国旗、ツインタワーを自国のイメージとして描いていた。



3 成果と課題

本実践で得られた成果は大きく2つ挙げられる。1つ目は「新たな他国の一面を見せることができる」教材を開発できたことである。授業者が予想した以上に、互いの国のイメージには大きな違いがあったため、生徒にこれまで知らなかった他国の一面を見せることができた。具体的には、日本の生徒が描いたアメリカのイメージで多かったものはオバマ大統領、野球（Baseball）、英語（English）であったのに対し、アメリカの多くの生徒が描いたのは、ニューヨークのツインタワーと国旗（星条旗）であった。アメリカの生徒はツインタワーを描く生徒がいなかったことに驚き、英語をイメージすることに驚いている様子であった。よって、本実践は「新たな他国の一面を見せることができる」教材であったとともに、本実践で生徒が描いたイメージが今後互いの国を理解していく入口の教材となる可能性を持つという点で成果があったといえよう。2つ目は、互いの国への興味・関心を高めることができたことである。授業中、授業後に、生徒は様々な日本への質問を教師に問いかけてきた。

課題は以下の2点である。まず、本実践を行う直前に、アメリカの連携校教員が日本について簡単な紹介VTRを見せていたため、生徒たちの日本のイメージがそのVTRの内容に偏ってしまった点である。事前に生徒が日本について少しでもイメージを持てるようにとの配慮であったが、授業者は「学校で日本について何も学んでいない生徒」を想定していたため、イメージの結果に偏りが生まれてしまったことが課題であった。2つ目は、今後この内容をいかに日本の生徒に伝えていくかである。本実践は、あくまで「互いのことを理解する」ための出発点となる授業であったので、今後どのような授業を日本とアメリカ両校で行うかが課題であろう。

【自己の変容】

本実践を通して、子どもが自国や他国に対して持つイメージの多様性に気付かされた。同じアメリカに住む子どもでも、アメリカと聞いてイメージするものは様々であった。しかしながら、その多様なイメージの中に、描いた子どもの文化的、歴史的背景とアメリカという国の文化的、歴史的背景が表れており、私自身が抱いていたアメリカのイメージも変容していったのである。そして、世界中の国について、教師自身も「互いに理解する」経験が必要であると改めて感じた。

第6学年 異文化理解 “Let’s make original Karuta and play it !”

教育学研究科学習科学専攻学習開発基礎専修 福 山 理

1 ねらい

本授業のねらいは、日本の伝統的な遊びの一つであるかるた遊びを紹介し、子どもたちにアメリカの文化を紹介できるようかるたをそれぞれに作成してもらうとともに、作成したかるたを使って実際にかかるた遊びをしてもらうことで、楽しみながら日本とアメリカの文化について考えてもらうことである。

2 概要

まず自己紹介を行い、日本の文化について紹介した。京都や広島の世界遺産などの写真を提示し、どういうものか一つ一つ説明を行っていった。子どもの多くが初めて見る日本の写真に興味を持っていた様子であり、手を挙げて質問を行う子どももいた。



それから、かるたについて説明を行った。かるたとはどういうもので、どのように行うのか、絵札用と文章用のかるたを見せながら紹介をしていくとともに、かるたを床に並べ実演しながら説明を行っていった。次に、子ども一人ずつに二種類のカードを渡し、一つは文章用、もう一つは絵札用といったことを説明してかるたを作成してもらった。子どもたちは意欲的にかるたの作成に取り組むとともに、早く出来上がった子どもは二枚目、三枚目と新たにかかるたを作成していった。そして、子どもたちが作成したかるたを用いて全員でかるたを行った。多くの子どもたちが積極的にかるたに取り組み、とても楽しんでいる様子が見られた。最後に一番かるたを手に入れた生徒に日本のかるたを賞品としてプレゼントし、授業に参加したすべての子どもたちの努力をねぎらい、授業を終えた。

3 成果と課題

成果として、子どもたちにとって当たり前のもとなっているアメリカの文化について考えさせることができたとともに、かるたをとても楽しんでくれたことが挙げられる。多くの生徒が楽しみながらかるたを作成し、早くできた子どもやもっと作りたい子どもはかるたを二枚目、三枚目と次々に作成していった。それによって、かるたは実際に行う楽しみだけでなく作る楽しみもあり、教材として有効であることを実感することができたように思う。

課題として、かるたを作成するときにルールを十分に理解できていない子どもや、かるたを行う時にその輪の中に入れなかった子どもが数名いたことである。じっくり時間をかけて一人一人が理解できるようにかるたの説明を行うことが必要であったと思うとともに、かるたを行う際に十分なスペースを確保し、かるたを行うやる気や雰囲気子どもたち全員に出させることが教師として必要であったと思う。

【自己の変容】

私は英語の教師を目指しており、これまで数回英語科の授業を行ってきたことはあったものの、授業のすべてを英語で行うことは今まで経験がなかった。そのため授業前はとても緊張し、授業が上手くいくか、子どもたちはかるたを楽しんでくれるかといった不安が強かった。しかし、子どもたちは日本の文化やかるたについてとても興味を持ち活動にも積極的に取り組んでくれた。それによって私は改めて子どもたちと学びを共有することの楽しさについて実感することができたとともに、やればできるということを実感できたように思う。これからも英語の教師を目指す者として、教材研究や子どもの関心といったものについて理解を深めるとともに、経験を積んで実りある授業づくりを目指していきたい。

第7学年 社会科(ESD) “Sustainable Transportation Network for a City”

教育学研究科科学文化教育学専攻社会認識教育学専修 中 村 光 則

1 ねらい

本授業のねらいは、2つある。1つ目は、グリーンビル市と東広島市の病院の立地の違いを読み取り、その理由を考えることを通して、2つの都市の交通の違いを理解することである。2つ目は、持続可能な都市交通システムとしての公共交通機関の導入について考察することを通して、環境的に負荷の大きい個別交通を見直す意識変革のきっかけとすることである。

2 概要

- (1)東広島市の紹介と位置の確認をし、グリーンビル市と人口や面積を比較し両市のイメージをつかむ。
- (2)グリーンビル市と東広島市の総合病院の立地の違いから、両市の交通手段の違いを理解する。
- (3)東広島市の鉄道やバスなどの公共交通機関について、写真や路線図から理解する。
- (4)自家用車利用と公共交通機関利用のそれぞれのメリット、デメリットを考え、ワークシートに書いて発表する。
- (5)グリーンビル市で病院に行きやすいようにバス路線を自分たちで考え、グループごとに発表する。
- (6)将来にわたって持続可能な交通手段について一人一人考え、ワークシートに書いて発表し、意見を交流する。



3 成果と課題

本授業における成果は、日米2都市の交通手段の違いから持続可能な将来の交通手段を考えさせるESD授業をアメリカの公立中学校で行い、現地の生徒たちの反応に直接触れることができた点である。持続可能な都市交通は現在のような自家用車中心ではなく、路線バスや列車、地下鉄といった公共交通機関であることをアメリカの生徒たちも認識しており、具体的なバス路線の考案もグループごとに意欲的に行い、理由とともに提案してくれた。持続可能な社会の実現を取り扱うことが日本の新学習指導要領で明記されたばかりであるが、アメリカにおいても持続可能な社会の実現に向けたESD授業で生徒たちが将来のよりよい社会について考えていることが実感できた。

課題は、生徒それぞれの意見や考えをうまく取り上げて、揺さぶり発問をしたり、詳しく理由を述べさせて議論させたりするような授業ができなかったことである。生徒たちは大変意欲的で、かなり自分の考えを発表してくれていたにもかかわらず、筆者が聞き取ることができずに、生徒に発表させるだけの授業となってしまったことは悔やまれる。授業者の英語力の必要性を、かなり痛感させられた。

【自己の変容】

今回実施したESD授業は、英語力のない筆者には難しい内容・目標の授業であったが、教材の工夫や現地校の先生の授業中の支援もあって、なんとか自分が考えさせたかった内容を生徒たちに考えさせることができた。英語が苦手な、話せない、聞き取れない不安をかかえたまま臨んだが、将来の持続可能な都市交通の姿についてアメリカの生徒たちはよく考え、ワークシートや地図に書き込み、発表してくれた。ほっとするとともに、何とか思いは伝わるものだと感動した。英語力が高いに越したことはないが、発問や回答の選択肢の英文をプロジェクターで示したり、生徒の考えをまずワークシートに書かせたりといった工夫や、ジェスチャーや表情などからもやり取りがある程度できるということを実体験した。

4 本年度の授業の整理と考察

(1) 本年度の授業と事前の取り組み

2011年度体験型海外教育実地研究（米国ノースカロライナ州）において実施された授業は、次のとおりである。

表1 実施授業の学年と教科等

学年	教科等，題材・テーマ*
A 4	異文化理解 Let's Enjoy FUROSHIKI !!
B 4	音楽科 Listening to the Japanese tune, and applying the title to it
C 4・5	社会科 Globalization and Glocalization through MacDonalad
D 5	異文化理解 What image is your country?
E 6	異文化理解 Let's make original Karuta and play it!
F 7	社会科 (ESD) Sustainable Transportation Network for a City

*「教科等，題材・テーマ」は，参加者（授業者）が付したものであり，授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

参加者は，日本での事前学習において，授業の目標，内容，教材，学習過程などについて相互に協議・検討し，具体的な準備を進めた。また，英文の指導案を作成し，ワークショップにおいて，ウォールコーツ小学校のワトソン先生，エルムハースト小学校のジル先生，元エッペス中学校のクーパー先生から児童生徒の実態に基づく助言をいただきながら，指導計画の改善を図った。その際，授業実施学年については，参加者の希望と指導内容を考慮して決定した。

さらに現地では受け入れ校の関係教員と事前の打ち合わせ会を行い，授業を実施するクラスを授業前日に観察することができた。このことにより児童生徒の姿をイメージしながら最終的な指導計画の調整を行い，授業に臨むことができた。

授業を実施するにあたり，このように多くの時間を費やして参加者間で協議・検討し，訪問先の各校の児童生徒の実態を踏まえた先生方の助言に

基づく指導計画の修正を綿密に行うことができたことは，本実地研究の一つの成果であると考ええる。

(2) 授業についての考察

本年度の授業について，主な成果と今後の展望を以下に示す。

① 活動の目的意識とまとめ

風呂敷を用いて様々な形状の物を包む活動(A)，「春の海」を鑑賞してイメージ画を描く活動(B)，諸国のマクドナルドのメニューを比較する活動(C)，日米相互の国のイメージを比較する活動(D)，自国（米国）を象徴するカルタの創作(E)，持続可能な交通システムの考案(F)等，日本の伝統文化への理解や日米の文化の比較・相互理解，さらには文化の創造を促す学習材が新たに開発され，何れの授業においても，米国の児童生徒が目的意識をもって主体的に取り組む活動が発達段階に応じて展開されていた。しかしながら，授業のまとめについては予め設定されていた活動の背景となる教育的価値を授業者が一方向的に唱える形式となりがちである。今後は，活動による児童生徒の認識の深まり・変容を児童生徒が自ら表現する形でのまとめを期待したい。

② 授業の目標，内容，方法の焦点化・明確化

日本文化の有する価値について，予備知識のない米国の児童生徒が1単位時間という限られた時間枠の中で理解を深めていくことは難しいことである。本年度の授業では，授業の目標，内容，方法が焦点化・明確化されていたため，米国の児童生徒が日本文化とのかかわりを無理なく楽しみながら，それらの価値に触れることができた。

③ 多様な表現を用いたコミュニケーション

参加者の多くは，抽象的な言語（英語）による表現を補うために，電子黒板を用いた現実の映像やモデル（絵図）の提示，具体的な操作や試演，ボディアクションなど，様々な表現の工夫・関連づけを行った。外国語や母国語の言語能力は，教員のグローバルな資質の一つであることに違いないが，たとえ高い英語能力を有していたとしても，また母国語での授業においても，言語のみに頼らない多様な表現の工夫・関連づけに努め，児童生徒の学習内容の理解を一層深める努力を継続したい。

ここに示した成果と展望は，異文化間コミュニケーションを重視した授業構成力及び実践的指導力の向上につながるものと考ええる。

5 連続参加者の振り返りと考察

(1)連続参加者の振り返り

本年度の「体験型海外教育実地研究」の特徴の一つは前述のとおり2年連続参加者の存在である。そのうち2名は希望により初回参加者と同様に授業を実施している。この2名の授業を中心とした振り返りは、「3 参加者の報告」に示しているとおりである。もう1名は、授業は実施せずいわゆるティーチングアシスタント兼メンターとしての参加であった。この1名の振り返りは以下のとおりである。

1. 2年連続の参加者としての気付きと感想

2年連続の参加者として私が一番感じたのは、「パートナーシップ」というところであった。1年目の時にはグローバル・パートナーシップというものをそこまで意識することがなかった。しかし、本年度現地の先生方の歓迎やレセプションを見て、強く「パートナーシップ」を感じた。もちろん広島大学と、ECUや関係3校とのそれぞれの関係もあるが、関係校の先生同士が、実に仲良さそうに話している姿を見て、むしろそれら個々ではなく、広島大学、ECU、関係校が一つの輪となって、パートナーシップを結んでいるという感覚を得た。このような教員同士の繋がりを、日本でも作りたいと強く感じた。

2. 初回参加者の授業づくりや授業実践に関わって

昨年は全員が同時に授業をしたため、今回初めて学生の授業を見ることが出来た。それを見て感じたのは、やはり「実物のチカラ」であった。たとえば「風呂敷」や「日本の高校生が考えるアメリカイメージベスト3」などは、それだけで子どもたちの心をつかみ、授業にぐっと引き寄せることが出来ていた。日・米にかかわらず、やはり「実物」を教室に持ち込むことは、児童生徒の動機づけに非常に重要であることがわかった。

3. 授業以外のところでの1年目の参加者の状況について

今年の1年目の参加者は、教科教育を専門とする者が多かった事もあり、学校見学でも教材や教科書などに関心を持っていた。いく

らかの学校では、教科書をいただいたりして、教科に対する意識の高さを感じた。

4. 2年連続の参加者としての自身の変容について

今年度は授業がなかったことや、街そのものに慣れたことによって、学校をしっかりと見学することが出来た。昨年は、日本とアメリカの共通点に目が行きがちで、「どこに行っても子どもは同じ」という印象を受けたが、本年度は違いにより目を向けることができ、「アメリカと対比したときの日本の学校」について考えることが出来た。具体的にはアメリカは、椅子の色によって教室を出る順番を決めたり、体育館に集まるときに枠を指定して集まったりと、「枠」を明確に設定し、その中で自由にといた雰囲気であり、日本は枠を明示しないかわりに、教師が指導したり、文脈から自分で考えたりするということを感じた。このように、海外と比較したときの日本の教育の特徴を捉えたことによって、よりグローバルな視点で日本の教育を考え、また、日本の教育の枠を捉えなおすことができた（澤口陽彦）

(2)連続参加者の振り返りの考察

連続参加者の振り返りを授業と授業外とに分けて考察する。

授業については、前掲の報告や参加者との面談をとおして、次のような共通点が見られた。

- ① 日本の児童生徒が描いた絵や考えたイメージが授業に持ち込まれていること。
- ② 授業づくりのプロセスや授業の本質に対して強く意識が向いていること。

①については、米国の児童生徒の関心に応ずるものであり、同じ年代の児童生徒が描いた絵や考えたイメージに出会うことによって、自文化や自分自身を見つめるきっかけとしても機能している。昨年度の経験が生かされていると考えられる。

②については、今回の授業を振り返るだけでなく、自然に前回の授業の状況も踏まえた振り返りとなることから、授業論としての振り返りになったと考えられる。

授業外の全体については、3名の連続参加者が、本授業科目の構成意図やグローバル・パートナ

シップ・スクールというプロジェクトに対する気付きを得ていることが重要であろう。当然ながら、初回の参加では、自分の授業やいろいろな体験そのものに意識が強く向く。連続して参加することによって、その背景としての思いや組織、システムにも気付くことができるのである。

このような状況を踏まえるならば、連続参加は、単に同じことを二回するというのではなく、新たな学びが構成される場であったと言える。その一方で、連続して参加するには経済的な側面など様々な制約があるため、一回の参加でも授業論やプロジェクトの背景に一定の意識が向くような工夫も必要であることが明らかとなった。

6 おわりに

本プログラムは発足から5年目を迎え、2009年度からは教育学研究科・教職高度化プログラムの選択科目として位置づいてきた。毎年9月中旬の現地での教育実地研究だけでなく、数回を重ねた事前・事後指導によって授業計画を練り、模擬授業を行い、さらには広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センターの協力を得て、アメリカから初等中等教員を招いて指導案検討に協力してもらったことで、教育を通じた国際交流に大きな成果が得られた。以下、参加者の報告から本年度のプロジェクトを総括し、来年への課題を考えたい。

参加者6名の声を集約すれば、次の3点について言及があった。第1に、参加者の異文化コミュニケーション能力に大きな進展が見られた。日本語が全く通じない環境で授業を実施することは負荷のかかる作業であるが、まさに英語を手段として全身でコミュニケーションを行い、伝える内容のおもしろさで現地の生徒を引きつけようとする努力が認められた。また、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度に大きな変容が見られた。これには、前年度の参加者による助言も大きな役割を果たしたと言える。

第2に、指導案検討など授業改善についても取り組みがさらに深くなったことが挙げられる。慣れない言語での指導案作りを通して、いかに目標を明確にし、内容を精選して分かりやすい指導案を作成するかは、本研修ならでこそ求められるニーズである。教師と生徒が共有する部分の多い

「高コンテキスト文化」に属する日本人が、アメリカ文化という多様性により共有部分の少ない「低コンテキスト文化」の中で、理解を得るためには授業形式において多くの工夫が必要となった。さらに、子どもが主体的に学ぶことを支援しようとするアメリカの教師による授業を見学、体験することは、自らの授業のあり方について、新たな視点を与えてくれた。

第3に、これまであまりに身近すぎて見えなかった、日本文化や日本の学校の良さを再発見する機会になったことである。例えば、日本文化を教えるために意識的に学習することを通して、自らの文化の考え方のすばらしさを感じることができたとする声が聞かれた。また、アメリカの教師や子どもたちが日本について持っているイメージを知ることにより、他者の目を通して自らを客観視する機会を持ったことは、異文化間教育を推進する上で貴重な体験となった。

最後に、次年度以降に取り組むべき課題について考える。まず、現地の学校との事前連携をどのように図って行くかである。時として、現地の教師による日本に関する授業によって日本のイメージが特定化されることは、実習生が計画した授業との整合性に影響を与えることが予想されるため、教師同士の相互理解が必要となるであろう。さらに、この実地研究をアメリカでの実践に止めるのではなく、授業後に得られた現地での相互フィードバックなどをもとに、日本の教室で再授業を試みる可能性も考えたい。

【参考文献】

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」、広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻、2007、pp.43-56。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」、広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻、2008、pp.39-53。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか

「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp.95-104。

- 朝倉淳・小原友行・深澤清治・松浦武人「国際化社会に対応する教師教育・教員養成のための教職国際化プログラムの開発研究」, 『広島大学大学院教育学研究科リサーチ・オフィス共同研究プロジェクト報告書』第8巻, 2010, pp.33-40。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮

奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp.155-168。

- 朝倉淳・小原友行・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子「国際化社会に対応する教師教育・教員養成のための教職高度化プログラムに関する基礎的研究」, 『広島大学大学院教育学研究科リサーチ・オフィス共同研究プロジェクト報告書』第9巻, 2011, pp.1-10。